

食の安全講演会（BSEに対する正しい理解のために）における 牛肉の消費動向アンケート調査結果

片 平 清 美
（農学部附属農場）

はじめに

国内でBSE（いわゆる狂牛病）に感染した牛が確認されて以来、消費者の牛肉離れが進んでいる。鹿児島大学においては、狂牛病に関するプロジェクトが行われて、消費者に狂牛病の正しい知識を普及し、牛肉の消費の回復を図る努力がなされている。農学部においては、平成13年11月22日に、農学部獣医学科の岡本嘉六教授を講師として、『食の安全』講演会が開かれた。この講演会には200名以上の参加者があった。

この講演会において参加者全員に狂牛病に関するアンケート実施したところ、109名分の回答が得られた。その結果を報告する。

アンケート調査項目

アンケート調査項目の内容は、大まかに分けて

- (1) 狂牛病発生後の消費動向
- (2) 飼料の安全性に対する意識
- (3) 講演会についての感想。の3点であった。

調査結果

(1) 狂牛病発生後の消費動向

狂牛病発生前後で牛肉消費量が変わらないとの人が約60%に達した。全く食べなくなったという人は5%未満であった。牛肉に代替する蛋白質食品としては、ブタとトリがそれぞれ40～50%であった。

(2) 飼料の安全性に対する意識

飼料の安全性に関しては、牛の飼養方法や飼料原料に対する関心が高いことがうかがわれた。その中で、現在狂牛病の感染源として疑われている肉骨粉の使用を禁止すべきであるという項目に丸をつけた人は、約半数にとどまった。

(3) 講演会についての感想

今回の講演会の感想として、約半数（43.1%）の人が、安心して牛肉を食べられることが分かったと回答した。また、今後もこのような講演会を開催して欲しいと答えた人は、87.2%にも達した。



写真1. 講演会の様子



写真2. 講演者：岡本嘉六先生



写真3. 牛肉即売会



写真4. 牛肉の試食会

講演参加者・消費者の声

- 生産者のナマの声を聞きたい。
- 主婦の参加を多くすべきだ。
- マスコミの注目点が間違っている。
- 大学が学究の場で地場産業や市民に密着してこのような企画は、危機の時期であろうとなかろうと、必要なことである。
- 狂牛病の人への感染が解明されないと、また行政の対応の不信感がなくなると、発病確率が低いと言っても安全性に対する不安はぬぐいきれない。
- 専門家の立場で正しい情報を流して欲しい。
- テレビで専門家の情報を流すべきである。専門家の意見は説得力がある。とてもよい企画、分かり易かった。より多くの人々に講演を聴いてもらいたい。
- 正しい知識を広めて欲しい。